

## 剣道選手に生じた母趾種子骨障害の2例

○上條 哲<sup>1)</sup>, 熊井 司<sup>1)</sup>, 谷口 晃<sup>1)</sup>, 松田 剛典<sup>1)</sup>, 田中 寿典<sup>1)</sup>,  
田中 康仁<sup>1)</sup>, 東山 一郎<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 奈良県立医科大学 整形外科

<sup>2)</sup> 松倉病院 整形外科

今回我々は国体レベルの剣道選手に生じた2例の母趾種子骨障害を経験した。

### 【症例1】

18歳女性。H19年5月下旬頃より、踏み込みの際に左母趾底部の疼痛を自覚するようになった。XP, CTにて母趾外側種子骨の異常が認められた。NSAIDs, 足底板等による保存療法を試みたが、全く踏み込みが出来ないほど疼痛が増悪してきたため、sesamoidectomyを施行した。術後1年半を経過し、ほぼ疼痛なく剣道に復帰している。

### 【症例2】

17歳男性。H21年5月下旬頃より、踏み込みの際に左母趾底部の疼痛を自覚するようになった。XP, CTにて左母趾外側種子骨の異常が認められた。当初はテーピングとNSAIDsで試合等可能であったが、疼痛の増悪傾向が強くなり、また早期の剣道復帰を望まれたためsesamoidectomyを施行した。術後2ヶ月の時点で疼痛なく、経過観察中である。

剣道の試合中、左母趾は常に背屈しており、さらに踏み込む際にはこの背屈は著しく増強されると考えられ、今回の障害は、繰り返された母趾背屈の強制による疲労骨折が考えられた。摘出した種子骨の病理所見も陳旧性の骨折と思われる所見であった。

母趾種子骨障害は保存療法が第1選択であるが、保存療法に抵抗する場合は手術療法が選択される。手術療法ではsesamoidectomyに対する良好な報告が多く、本2症例も疼痛が持続するため、sesamoidectomyを施行し良好な結果を得た。一方で、自家骨移植による骨接合術の良好な成績も報告されており、sesamoidectomy後の残存する疼痛の問題や、経年的な外反母趾の発生のリスクを考えると、今後の長期的な経過観察によっては術式の選択の一つになると思われる。